

niponica

にほにか

Discovering
Japan

2014
no.

| 4



特集

さらめく日本文化

日本語で「日本」を表す時の音「にっぽん (nippon)」をもとに名づけられた「にぽにか (niponica)」は、現代日本の社会、文化を広く世界に紹介するカルチャー・マガジンです。日本語版の他に、英語、スペイン語、フランス語、中国語、ロシア語、アラビア語の全7カ国語版で刊行されています。



細かい金粉で絵柄を描く「蒔絵（まきえ）」の手法で装飾された漆碗。
19～20世紀（2点とも所蔵＝京都国立博物館）



no.14
2014年12月19日発行

発行／日本国外務省
〒100-8919
東京都千代田区霞が関2-2-1
<http://www.mofa.go.jp/>

表紙／LEDのイルミネーションと東京タワーの対照が美しい、東京・六本木の夜景（写真＝アフロ）

特集

さらめく 日本文化

- 04 さらめく日本の伝統
- 10 日本が誇る光の宝飾
真珠
- 14 光がつなぐ、
技術と文化
- 18 二次元で輝く
- 19 光が彩る、
日本の夏祭り
- 22 召し上がれ、日本
おせち
- 24 街歩きにっぽん
城崎・出石
- 28 ニッポンみやげ
江戸切子



特集

さらめく日本文化

伝統的な芸術品から、現代のポップカルチャーまで。
金銀や光を駆使して練り上げられてきた、
日本のさらめく文化を見渡す。

上／貝殻の絵や和歌でペアを探すゲーム「貝合わせ」。貴族文学の傑作『源氏物語』の世界を金の彩色で描いた17世紀の作品。『彩色源氏絵貝桶』
（所蔵＝東京国立博物館 Image: TNM Image Archives）

さらに日本の伝統

書物や絵画、工芸に建築……。
日本文化に根づく、華やかな装飾芸術の伝統とは。

談話●日高 薫

日本美術には、装飾性を排した簡潔さや、色のないモノトーンの世界に美を見いだす文化がある一方で、金銀をはじめとするきらびやかな素材と鮮やかな色彩を組み合わせた、絢爛で華やかな文化もまた、長く育まれてきました。

お経も和歌もきらびやかに

超越的な宗教世界を金で飾る行為は万国に共通した表現ですが、仏教ももちろん例外ではありません。釈迦自身が光り輝いていたとされる経典もあるほどで、仏の体や堂内を金で飾ることは、日本でも平安時代（794～1192）あたりから盛んに行われてきました。経文を金文字や銀文字で写経することは中国をはじめとする東アジアの地域で広く見られることですが、さらに金銀をあら

ゆることに派生させて使ってしまうのが、日本の特徴です。

平安時代末期の12世紀、時の権力者によって神社に奉納された経文と、貴族がつくった和歌集や絵巻には、ともにきらびやかな装飾が施されています。世俗の読み物も経文のように金銀で飾るのが、当時の貴族の感性だったことがわかります。

「箔散らし」は、その装飾方法として、当時最も流行した技法のひとつです。金銀箔の大きさを変えたり、粉状にしたり、不定形に千切ったりしたものをさまざまに組み合わせることで、紙面に不思議な幻想性が増していくこの技法は、やがて絵画にも用いられるようになりました。豪華な金の輝きが、白みの強い銀や洗練された色彩と渾然と溶け合い、絵画に優美さを添えています。



漆に金粉をまいた地に金と青金（金銀の合金）、さらに螺鈿で水の流れと車輪を描いた時絵の硯箱。『片輪車時絵螺鈿手箱』12世紀（写真＝京都国立博物館、所蔵＝東京国立博物館）



写実より遊び心

中国や西洋の絵画は、実際に見えるものをそのままに再現しようと、写実性を突き詰めていく傾向があります。中国の影響を受けることが多かった日本美術ですが、最終的には全く対照的なものを生み出してきたといっても過言ではありません。日本美術では、写実を徹底させることで崇高な精神性を表現するというよりは、見た目の心地よさやデザイン性を重視する、いわば「遊び」の精

神を尊ぶ傾向が強いといえるのではないのでしょうか。

例えば、ごつごつした岩や切り立った崖を墨などで描く中国の風景画・山水画にくらべ、日本の絵画では、地面の起伏を陰影やグラデーションではなく「面」で捉え、金銀の箔などを用いて装飾的に表現します。16世紀以降盛んに制作された日本の屏風絵も、大きな画面いっぱいに金箔をふんだんに貼ることで空間の奥行きや空気感を失うかわりに、描かれた花や木や動物などの絵柄を圧倒的に印象づけるユニークな表現を獲得しています。



上／「箔散らし」の技法を駆使した和歌集『本願寺本三十六人家集 躬恒集（みつねしゅう）』1112年頃（所蔵＝本願寺）
左／物語の絵も装飾的に。『伊勢物語絵巻 初段』13世紀末～14世紀初（所蔵＝和泉市久保惣記念美術館）



大胆かつシンプルに描かれた花が金地に映えて見事な屏風。琳派を代表する芸術家・尾形光琳作。[燕子花図屏風]（右隻）。18世紀（所蔵＝根津美術館）

こうした「アンチ遠近法的」ともいえる技法は、中国の絵画とはかけ離れた日本的な感性で、数々の装飾美術の名品を生み出してきました。

きらめきでつながる装飾文化

8世紀頃に生まれ、日本独自の工芸としてさまざまな発展を遂げた「蒔絵」は、漆に金粉や銀粉を組み合わせています。きらきら光る貝を使う螺鈿細工は世界の各地で見られますが、蒔絵と組み合わせるとエキゾチックな雰囲気になるのが面白いところ。ちなみに日本の絵画では金箔を非常に薄く使うので金の使用量は意外に少ないのですが、蒔絵で使う金粉は一つひとつの粒が金箔よりずっと大きく、使用量も比べものになりません。蒔絵

の金が重厚な印象を与えるのはそのためです。貴族文化が栄えた10世紀以降、蒔絵や螺鈿の装飾は、さまざまな用途の調度品から建築装飾にいたるまで、富裕な人々の生活を雅やかに彩りましたが、鎌倉時代（1192～1333）、武士の台頭とともに金地のより豪華な蒔絵が現れ、力強い印象となります。

16世紀頃、茶の湯を核とし簡素でもの静かなものに美を見いだす「わび・さび」の文化が、それまでの華麗な貴族文化に異をとなえるものとして確立され、本流のひとつになっていきます。しかし、日本人はきらびやかな文化を捨てなかったばかりか、尾形光琳（1658～1716）など江戸時代（1603～1867）の「琳派」に代表される装飾美術はますます隆盛を極めました。

このような、大胆なまでに楽しいデザインや気持ちよさを優先させる日本人の美意識は、現代のポップでかわいい文化にも生き続けており、きらめく日本の装飾文化の伝統が今なお受け継がれていると感じることができます。

日高 薫（ひだか・かおり）
国立歴史民俗博物館研究部教授。専門は蒔絵を中心とする漆工芸史、および日本の装飾芸術。主著に『日本美術のことは案内』がある。



きらめくデザインの躍動

遊び心のある形や模様^{あそび こころのかたち もよう}に金銀の輝き^{きんぎんかがや}が加わり、強烈な印象^{きょうれつ いんしょう}をつくり出す^だ。



上／緑の透かし部分に、金の水鳥が重なるように描かれた鉢。『色絵芦雁文透彫反鉢』（所蔵＝出光美術館）
下／雪化粧した松の絵に金を加えた平鉢。『乾山焼 色絵雪松図皿』（所蔵＝大阪・湯木美術館、写真＝宮村政徳）
ともに琳派の尾形乾山（1663～1743）の特徴がよく出た独創的な器



金の輝きが勇ましさをもり立てる鎧。堅い殻とトゲが武將に好まれたサザエの兜は、どこかユーモラス。『金魚鱗小札二枚胴具足』17世紀（所蔵＝東京国立博物館 Image: TNM Image Archives）



金、螺鈿、鉛を駆使し動物や草木のモチーフを大胆に描く「琳派時絵」の手法でつくられた硯箱。永田友治作。『横鹿時絵螺鈿料紙箱』18世紀（所蔵＝京都国立博物館）

歌舞伎の代表的な演目『助六由縁江戸桜』で、ヒロインの揚巻が登場のシーンで着る衣装（写真＝松竹株式会社）





選りすぐられた真珠を使ったミキモトのネックレス。日本の風土と知恵が高貴な輝きを生んだ

日本が誇る光の宝飾 真珠

真珠は、古代からそのやわらかな輝きが愛されてきた「海の宝石」。19世紀の終わりに発明された養殖技術によって、日本産真珠は世界中の人々から賞賛される宝飾品となった。

取材協力●ミキモト、パールシティー神戸協議会、日本真珠輸出組合、NPOひと粒の真珠、神戸パールミュージアム運営委員会
写真提供●ミキモト（10～11ページ）、パールシティー神戸協議会／神戸パールミュージアム運営委員会（12～13ページ）

世界中の女性に 真珠の輝きを——養殖真珠

真珠は、アコヤガイなどの二枚貝の体内で生まれ、育つ。貝の体内に入った異物が刺激となって分泌される「真珠質」と呼ばれる物質が、異物を核として何重にも層をなして固まったものが真珠だ。自然に形成される天然真珠は、採れる数も非常に少なく、古来、限られた人しか身につけることができない希少品だった。人の手で真珠をつくり出すことは不可能だと考えられていた——後に「真珠王」の異名をとる御木本幸吉がその歴史を変えるまでは。

幸吉が半円真珠の養殖を成し遂げたのは1893年のこと。1905年には完全な球体に近い真円真珠をつくり出すことにも成功し、世界で初めて真珠養殖への道を拓いた。

その手法は、母貝となるアコヤガイに核となる異物を挿入し、貝自身に真珠をつくらせるというものだ。天然真珠との違いは、核が自然に貝の中に入ったのか人為的に入れられたものか、ということだけ。貝から取り出せば、天然真珠と何ら変わらない「本物の真珠」だ。

当時、天然真珠の価格は世界中で高騰し、ダイヤモンドよりも高い値がついた。真珠を手にしたのは、少数の特権階級のみ。そうした中、幸吉は、「世界中の女性を真珠で飾ってみせます」と公言したという。その言葉どおり、幸吉が発明した養殖真珠は、瞬く間に世界中の女性を魅了し、20世紀中頃には、多くの女性の首元で、やわらかな光を放つこととなった。



御木本幸吉（1858～1954）。世界で初めて真珠の養殖に成功し、真珠王と呼ばれた



1907年から1920年代ごろまでの、英語で書かれたミキモトの新聞広告



幸吉は世界各地の博覧会に力作を出品した。写真はパリ万国博覧会（1937年）に出品された、着物を着るときに使う装身具・帯留め



上の帯留めは、部品の分解・組み合わせで、ブローチやかんざし、指輪など異なるジュエリーに変化する。この斬新な発想も人々を驚かせた



上／日本の真珠養殖はアコヤガイによるものを中心
右／真円真珠の養殖と研究のために幸吉が開設した、三重県・志摩市の養殖場



日本の風土が生み出した 気品あふれる清楚な美

宝石の評価基準には、大きさ、色、形、傷の有無などがあるが、真珠の場合、さらに独特の物差しとして「巻き」と「照り」がつけ加えられる。「巻き」は核を取り巻く真珠層の厚さで、「照り」は真珠内部から放たれる光沢のこと。巻きが厚くなるほど照りに深みが出て、価値も上がる。

この巻きと照りが日本の真珠の身上だ。真珠が水揚げされる11～12月は、海水温が下がるため、結晶構造が締まってきめ細かい真珠層が形成される。均等に重なった真珠層は、光の干渉によって、強く深い照りを生む。その繊細な輝きは、季節の変化が明確な日本で育った真珠ならではのもの。日本の真珠が最上級の評価を受けるゆえんだ。



真珠の選別作業。自然光の下で大きさ、色、巻き、照りなどを見極めながら一粒ずつ選り分ける

世界中の真珠が 集まる町——神戸

1950年代から60年代半ばにかけて、真珠は日本の輸出産業の花形だった。上流階級の人々やハリウッド女優などの装いに触発されて、各国の女性たちは日本の真珠にあこがれ、日本を訪れた外国人は、恋人や家族に真珠を買って帰った。日本は真珠ブームに沸いた。

その拠点となったのが国際貿易港として発展してきた、兵庫県・神戸である。瀬戸内海に面する神戸は、宇和島、伊勢、九州など、真珠の主産地の中間点に位置し、昔から真珠の集散地としての役割を担ってきた。立地とともに重要だったのが、町の北に位置する六甲山だ。南から差し込んだ太陽光が、緑の山肌に反射し、やわらかな北からの光となって降り注ぐ。真珠の質を見極めて緻密な作業を行うには、安定した北からの自然光が不可欠とされ、この光を求めて技術者たちもこの町に集まってきた。

各国からの買い付け業者も大挙して訪れた。「パールシティ神戸」の名は、日本国内よりも海外で知られるようになる。作家サマセット・モームはその短編に、日本へ真珠の調査に行く人物と在神戸アメリカ領事を登場させているし、女優チャールズ・チャプリンは新婚旅行で神戸を訪れた際、愛妻のために真珠を購入したという。



ピアスやイヤリングなど対で使うものは「ペア」を組む。大きさや色合いが同じ双子のような真珠を見つけるには、卓越した選別眼が必要だ



同じ等級の粒を並べてネックレスに仕上げる作業

ジャパン・クオリティの誇り

昔も今も、「最高級の真珠を手に入れるなら神戸へ」というのが目利きたちの共通認識だ。卓越した選別眼と高度な技術、日本人ならではの細やかな作業によって、真珠はさらに輝きを増す。

今日、世界で流通する真珠の8割がいったん神戸に集められ、この町から世界へ出荷されている。神戸の職



直径を測るゲージや、粒の大きさごとに選り分けるための穴のあいた板「フルイ」など、真珠の選別に使われる道具

人の手を経ることで、真珠はその価値をさらに高めるのだ。「ジャパン・クオリティ」はこの分野でも健在である。

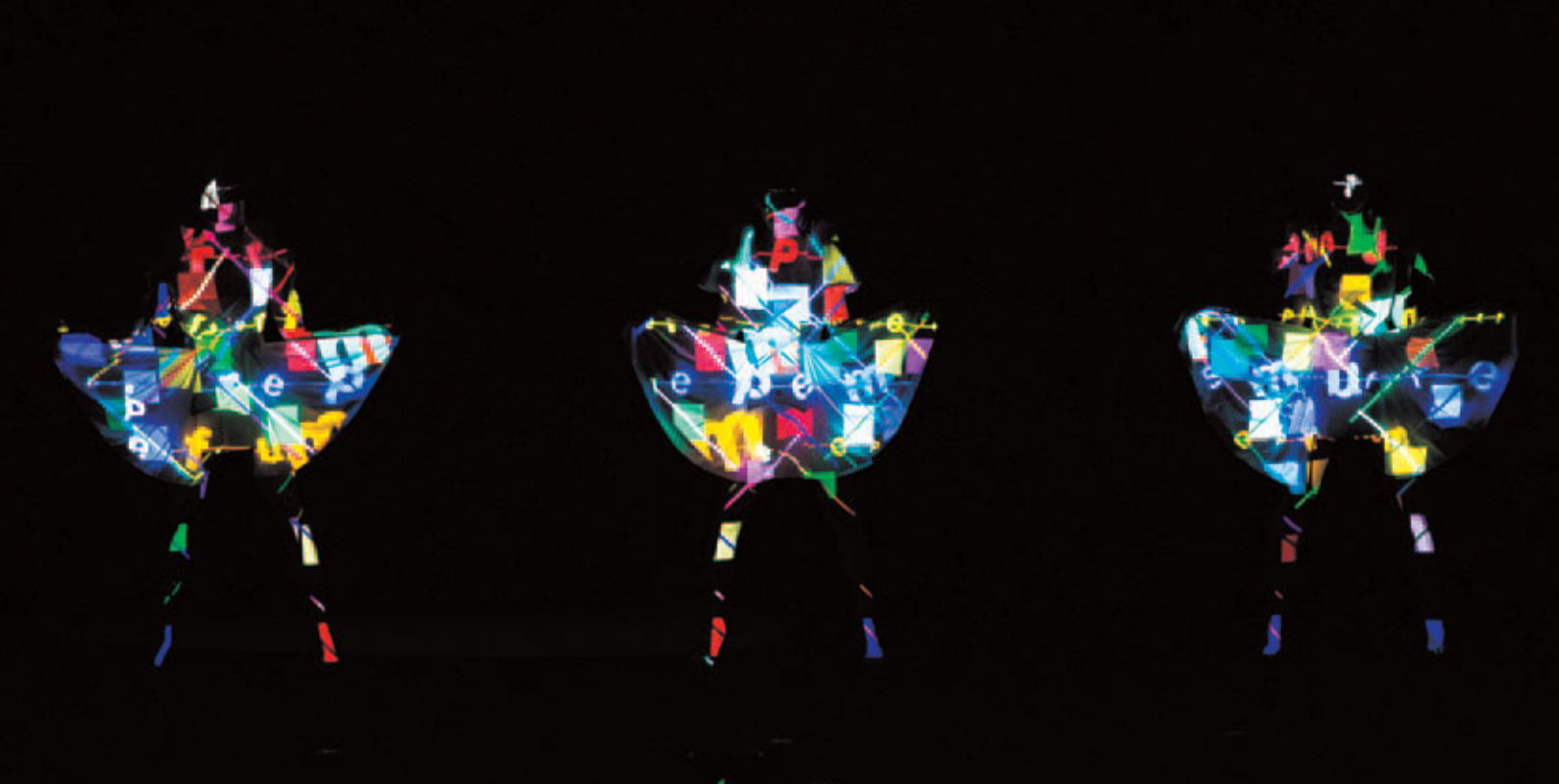
日本が世界に誇る高貴な輝き。その美しさを保ち続けるために、関係者の努力は今後も続く。



神戸の真珠の入礼会場。天井に照明がなく、自然光のみで真珠を見極める



国際港・神戸。町の背後にそびえる六甲山からの反射で、真珠を扱う作業に最適な自然光が生み出される（写真＝アフロ）



光がつなく、技術と文化

日本の芸術やデザインが、光という先端技術を身にまとい、新たな輝きを放ち始めた。
海外でも活躍するテクノポップユニットの舞台を、古き良き京都の町並みを、
金魚が泳ぐ屏風形の水槽を、光や映像がまばゆく演出する。
遺伝子技術を駆使し暗闇で輝く着物、気軽に立体映像が楽しめる玩具など、
光を懸け橋として技術と深く結びついた日本の文化が、キラキラと輝く。

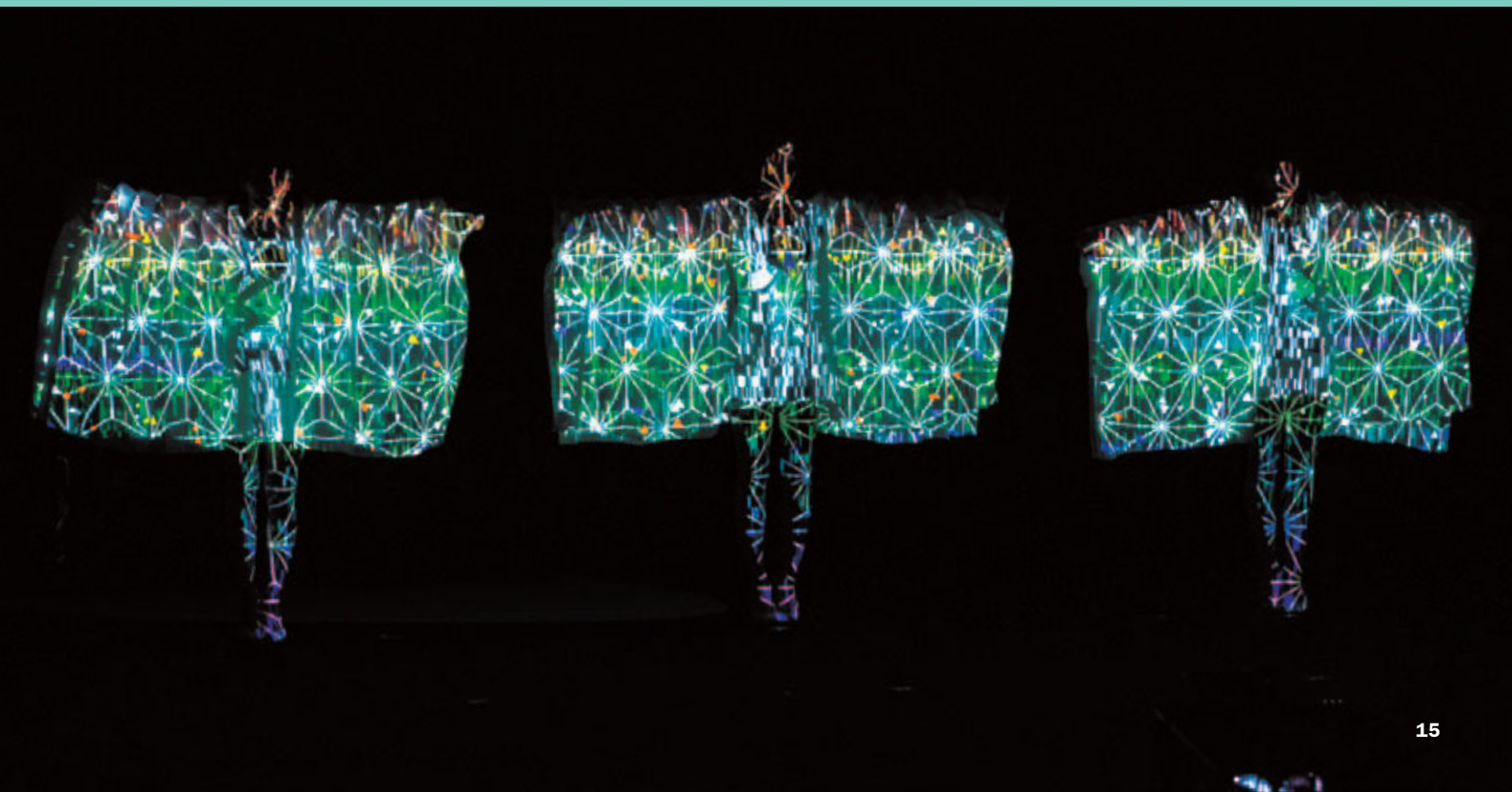
音と光が織りなすステージ

2013年6月にフランス・カンヌで開催された世界最大規模の広告展「カンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバル」。このステージで日本を代表するテクノポップユニット「Perfume」が披露したパフォーマンスは、世界中から集まった観客の大きな喝采を浴びた。

舞台上で歌と踊りを披露する3人の体をキャンバスとして、コンピュータグラフィックスの映像が投影されていく。Perfumeの姿を赤外線カメラと距離を測るカメラで写しながら同時進行で映像を生成し、3人が踊っても映像が後ろにはみ出すことなく衣装のパターンに映像が投影されるという、独自に開発された技術。映像その

ものが生命を宿し、自在に動き回っているかのようだ。この光のステージを技術面で支えているのが、映像クリエイター集団「ライゾマティクス」だ。映像を平面に投射するのではなく、立体物に貼りつけるように投影する「プロジェクションマッピング」の技術などを駆使し、音楽やテレビCM、Webデザインなど多分野で活躍している。

フランス・カンヌで開かれた広告展でのPerfumeの舞台。「ライゾマティクス」が誇るプロジェクションマッピングの技術を駆使し、3人に次々と映像が映し出される
©Cannes Lions, Dentsu Inc., Getty Images



屏風を泳ぐ金魚

18世紀頃から庶民の間で観賞魚として愛されてきた金魚と、照明や映像などの先端技術を融合させたユニークな展覧会が、2014年7月から9月まで、東京で開催された。ひときわ目をひいたのが、巨大な屏風の中を金魚が泳ぐ「ビョウブリウムⅡ」だ。日本で古くから間仕切りや装飾に用いられてきた屏風の形をした水槽に、自然の風物をテーマにした映像を投影。幅7m、高さ2m、厚さ25cmの亚克力製水槽の中を泳ぐ約600匹の金魚と映像が融合した、全く新しい美の世界である。

この展覧会のプロデューサー、アートアクアリウムアーティストの木村英智氏は、熱帯魚の専門店で経験を積んだ後に独立、アクアリウムとアート、デザイン、エンターテインメントを融合させた「アートアクアリウム」という分野を打ち立て、光や映像のほか音や匂いなども駆使した、五感に訴える展覧会を日本各地で開催している。展覧会で泳ぐ金魚たちの健康管理には細心の注意が払われており、投影される映像が金魚の健康に悪影響を与えることはないという。

約600匹の金魚が泳ぐ屏風形水槽に映像が投影される「ビョウブリウムⅡ」(写真=㈱エイチアイディー・インターアクティカ)

光る絹糸

暗闇の中で淡い緑色に浮かび上がる着物。絹で織られたこの衣装が緑に光って見えるのは、光るサンゴの遺伝子を組み込んだカイコが吐き出した「光る絹糸」を使っているからだ。茨城県つくば市にある政府系研究機関が開発した技術で、開発当初は光るクラゲの遺伝子を組み込んでいたが、現在はより明るく光る「アザミサンゴ」の遺伝子を使っている。

顕微鏡を見ながら直径約1mmのカイコの卵にまず金属の針で小さな穴を開け、その穴から極細のガラス針でサンゴの遺伝子を組み込んだDNAを注入する。一部の細胞にしかサンゴの遺伝子が組み込まれないため、当のカイコ自身は光る糸を吐くことはできない。だが、このカイコの次世代の個体は、全身にDNAが組み込まれることでサンゴが持つ緑色の蛍光タンパク質を含む糸を吐き出すようになり、そのまゆから得られた絹糸は、暗闇で青色LEDの光を当てると緑色に光り輝くのだ。別種のサンゴの遺伝子を組み込んだ、ピンクやオレンジ色に輝く絹糸もある。

ほかにも、抗菌成分を含む糸など、機能性を持つ絹糸の研究が進められており、再生医療や化粧品の素材などへの応用が期待されている。

独立行政法人 農業生物資源研究所が開発した、サンゴなどの遺伝子が組み込まれたカイコのまゆ(下)と、その糸糸で織られた着物(上)。青色LEDの光を当てると、緑やピンク色に輝く(写真=読売新聞社)



小さくても 本格的な立体映像

手のひらに載せた小さな箱に、立体的な東京の夜景が浮かび上がる——日本の大手玩具メーカーが2014年1月に発売した、立体映像を気軽に楽しめる玩具つきお菓子である(実際の主役は玩具の方)。

箱に記載された2次元コードをスマートフォンで読み込むと、映像のデータがダウンロードされる。次に箱の上蓋を外し内部に付属の反射板などの部品を取りつけ、そこに先ほど映像データを取り込んだスマートフォンを載せると、スマートフォンの画面に映された映像が箱の中で反射し、擬似的に立体画像が浮かび上がって見えるというしくみだ。

第1弾として発売されたのは、東京で行われたライトアップのイベントを再現した商品。これが玩具の世界に最新の映像技術を持ち込んだと評価され、業界団体が選ぶ「日本おもちゃ大賞2014」の「イノベティブ・トイ部門」で大賞を受賞した。手頃な価格も受け、子どもに人気のキャラクターなどを使った後続商品も相次いで発売されている。

箱の内部でスマートフォンの映像を反射させ、立体映像を楽しむ「ハコビジョン」(写真=㈱バンダイ)

省エネ電球で 京の町を照らす

早春と初冬の毎年2回、京都市で開かれる「灯り」と「花」をテーマにした催事「京都・花灯路」。白壁や石畳が美しい東山や、竹林の小径や水辺などの自然に包まれた嵯峨・嵐山地域の散策路を、約2500基の露地行灯のあかりがほんのりと照らし出す。この行灯の光源として、地元の電子部品メーカーが開発したLED電球が活躍している。

催事が始まった2003年当初は、行灯の光源に白熱電球を採用していた。LED化が早くから検討されていたが、行灯に収まる小さなものや、白熱電球のように広い角度で光を発することができる製品がなく切り替えが困難だった。そこで、地元の電子部品メーカーが、LEDチップをセラミック基板に直接実装したり、カバーの形状や素材に独自の工夫を凝らしたりして、LED電球の小型化に成功。約180°という広い角度で上質な光を出せるようになった。もちろん、LED電球の特徴である省エネ性も確保しており、白熱電球に比べて電気代は約8分の1になったという。



ローム㈱開発のLED電球を内蔵した露地行灯が、京都・東山区の散策路を照らす(写真=京都・花灯路推進協議会)



二次元で輝く

～マンガと絵文字を彩る記号～

登場人物の感情を巧みに表現する少女マンガと、
文字だけのコミュニケーションのメールには、輝く記号が欠かせない。

協力●美内すずえ事務所、白泉社、芳文社

マンガをより輝かせる

少女マンガの王道表現



想いを寄せる人から贈られた花を手に微笑む少女。目の星、背景の光が、恋する気持ちを表している（美内すずえ『ガラスの仮面』より）

©Suzue Miuchi
『ガラスの仮面』美内すずえ／白泉社

平凡な少女だった北島マヤが演劇の才能を開花させ、女優としてさまざまな試練を越えていく物語。2014年12月現在、49巻発売中



物や人を素敵に見せる



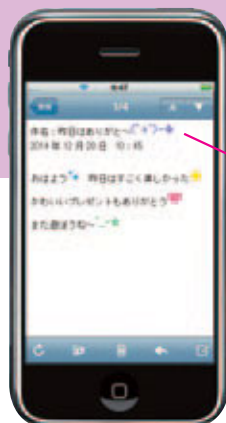
特定の物を魅力的に見せたり（上）、内面の喜びを表現したりする（下）ときにも、光の表現が駆使される（かきふらい『けいおん！』より）
©kakifly
『けいおん！』かきふらい／芳文社

高校の軽音楽部を舞台に、部員たちのほのぼのとした日常を描く四コマ漫画。全4巻



メールのコミュニケーションを彩る

携帯のメールに欠かせない絵文字。なかでも、楽しい、うれしいといった感情を気軽に表せる記号が、コミュニケーションをより円滑にしてくれる



件名：昨日はありがとう〜(๑)~☆
2014年12月20日 10:45
おはよう！ 昨日はすごく楽しかった
かわいいプレゼントもありがとう
また遊ぼうね〜(๑)~☆

光が彩る、日本の夏祭り

夏は、8月15日前後に祖先を供養する仏教の儀式・お盆があり、

また、古来、厄払いなどの祭りが数多く行われる季節だ。

山車をさらびやかに飾りたて、あかりをともし火をたき、祖霊や神仏をもてなす。

そうして受け継がれてきた光と色の祭典が、暑い日本の夏をさらに熱く盛り上げる。



水辺から見上げる 伝統のエンターテインメント 東京・隅田川の花火

江戸時代（18世紀）、疫病の死者供養と厄災除けを願う祭りで花火を上げたのが始まりといわれ、現代も盛大に行われる。色の配置や変化のしかたに独自の技術がある日本の打ち上げ花火の発展はここから始まった（写真＝アフロ）



真夏の夜を彩る巨大提灯 青森・ねぶた

紙に伝説の英雄などを極彩色で描き、中に入り込んだ巨大な山車を引き回す、勇壮な祭り。東北各地にあるが、青森市（下）や五所川原市（ごしよがわらし・右）など青森県のものがよく知られる（写真2点とも＝アフロ）



あでやかな 王朝文化を偲ぶ 京都・祇園祭

毎年7月1日から31日まで1カ月間催される八坂神社の祭礼。豪華な織物で飾った山鉾（山車）が提灯の光に映えて浮かび上がる（写真＝アフロ）

祖先を送る火の競演 京都・五山送り火

山の斜面に組んだ木に点火して文字や絵を浮か立させ、あの世にかえっていく祖霊を見送る伝統行事。鳥居形の炎が見える広沢池では同時に灯笼流しも行われ、山の炎と呼応して幻想的な光景が浮かび上がる（写真＝アフロ）



町を輝かせる、 さらびやかな飾り 仙台・七夕まつり

8月6日から3日間、宮城県仙台市では、彦星と織姫が年に一度会うとされる七夕の祭りを盛大に行う。願いごとが書かれた短冊つきの笹竹とともに、色鮮やかな和紙の飾り物「吹き流し」が町を彩る（写真＝picta）

金の灯笼をつけて踊る 熊本・山鹿灯笼まつり

お盆に灯笼を飾る風習があった熊本県山鹿市。60年ほど前から、女性らが灯笼を頭に載せ歩き踊る祭りが始まった。金銀の和紙でつくられた灯笼のあかりには、LED電球も使われている



召し上がれ、
日本

4

おせち

新年を祝う料理の宝石箱

写真●栗林成城、絵鳩正志 協力●赤坂浅田

「おせち」は日本の正月に欠かせない特別な料理だ。季節の変わり目の行事がある日に、五穀豊穡、子孫繁栄、家族の安全を願い、神に供えた料理「節供」に由来している。行事のなかでも代表的なものが正月であったことから、「おせち」といえば正月料理を指すようになった。

そのため、おせち料理には「おめでたいことが重なって起きるように」という意味が込められており、縁起がよいといわれる料理を、「重箱」という重ねられる正方形の箱に詰めていくのが特徴だ。中に詰める料理は、乾物や野菜、魚介類まで、さまざまな食材を使う。年の暮れのうちにつくっておいて、1月1日から数日間食べ続けるので、煮物など日もちのよい料理が多い。照りつやがよく、色鮮やかな見た目になるよう工夫されており、甘辛いもの、塩味のもの、酸味の効いたものなど、十種類前後の料理を重箱に詰めていく。料理の内容は地方や家庭ごとに若干の違いがあるが、欠かせないのは「黒豆」「伊達巻」「田作り」である。

砂糖や醤油で甘く煮た「黒豆」には、「豆」と、よく働くという意味の「忠実」が同音であることから、この先1年間、健康で元気に働けるようにという願いが込められている。「伊達巻」は、白身魚のすり身をまぜた卵の厚焼きを巻いたもの。「伊達」は華やかさや派手さを表す意味

の言葉で、見た目の豪華さから、おせち料理の中でも特に目をひく一品だ。また、昔は大事な文書を巻物にしていたことから、学問や習い事の成就を願う意味が込められている。「田作り」は、干したカタクチイワシの稚魚を炒って、砂糖、みりん、醤油を煮詰めたものをからませ、照

りを出した料理だ。カタクチイワシが畑の肥料として使われたため、五穀豊穡を願って、田作りと呼ばれている。年末になると、各家庭で数日かけておせち料理をつくるのが、伝統的な正月の準備のひとつであった。昨今はデパートや料理屋で買い求める

家庭も増えている。しかし、新年を祝い、縁起のよい物を食べて一年の幸せを願うという、おせちに込められた心は今も変わらない。色鮮やかで美しいおせちは、家族の願いが詰まった宝石箱なのだ。

左／2～3 cmの干したカタクチイワシを甘辛く炒った田作り
中／表面にシワが寄らないよう、甘く煮た黒豆。華やかにするため金粉を飾ることも
右／卵に白身魚やエビのすり身をまぜて焼いた伊達巻

下／重箱に美しく詰められた、料亭・赤坂浅田のおせち





1. 町なかを浴衣と下駄で散歩する人の姿が目立つ
2. 7つの公衆浴場のうちの「一の湯」
3. 城崎温泉駅から温泉街への通りには、名物のカニを出す料理店が並ぶ
4. 同じ通りには、カニ風味の菓子などのみやげ物売店もある
5. カニ形の最中（餅からつくった皮で餡を包んだ和菓子）



兵庫県北東部の豊岡市城崎町にある城崎温泉は、関西随一の温泉郷として知られる。

温泉の湧出は1300年前、古来湯治場として栄え、また文豪の小説の舞台となるなど、さまざまな人々に親しまれ愛されてきた。

城崎温泉で名高いのは、7つある外湯である。外湯とは、旅館などの宿泊施設を伴わない公衆浴場のこと。町の中心を流れる大谿川をはさんで点在する外湯は、それぞれに由来や自慢の風呂があり、お気に入りを見つけるのも楽しい。散歩に出かける時には、当地で「正装」とされる浴衣（素肌に着ける和服）と下駄（歯のついた木の台に紐をつけ足指をかける履物）を着用したい。夕

方になると大谿川沿いはライトアップされ、柳並木と川に架かる太鼓橋を美しく照らし出す。しっとりと輝く光に包まれながら、浴衣姿でそぞろ歩きながらの外湯めぐりは、身も心もほぐれる至福の時間である。

また大谿川沿いには、古くから多くの旅人を迎えた老舗旅館をはじめ、数々の旅館が立ち並んでいる。外湯めぐりはもちろんだが、旅館の中につくられた内湯も、内装などが工夫されているところが多い。

この地のもう一つの楽しみは冬の味覚の王、カニ。ことにこの地方で獲れるズワイガニは松葉ガニと呼ばれ、たっぷりした身と上品な甘みが堪能できる。

日中には、外湯の一つ、「鴻の湯」そばのロープウェイ



創業150年の旅館「西村屋本館」は、温泉も料理も充実している左／木の香りが清々しいヒノキの風呂
右／見た目も美しい料理の数々。名物の但馬牛（兵庫県産の黒毛和牛）とカニを味わいたい

街歩き

にっぽん

4

城崎・出石

散歩が楽しい温泉街

写真●伊藤千晴、西山昌吾
地図制作●尾黒ケンジ
協力●西村屋本館、そば藤



写真／ライトアップされた城崎・愛宕橋



大師山山頂駅まで7分間の空中散歩が楽しめるロープウェイの展望台からは、城崎の町や日本海が一望できる

で大師山の山頂まで登ってみるのもおすすめだ。展望台から見おろす温泉街と遠くに見える山並み、日本海へと流れる円山川は、季節や気候によって豊かな表情を見せてくれる。

城崎温泉から車で40分の地にある出石町は、城崎を訪れたらぜひ足を延ばしたいところだ。こちらも城崎同様、古い歴史と文化に培われた町である。町を歩くと、シンボルともいえる大時計台の辰鼓楼をはじめ、出石城跡、上級武士の邸宅である家老屋敷、赤壁が印象的な酒蔵（日本酒を醸造・貯蔵する蔵）など、17世紀から20世紀



上／出石のシンボルである時計台・辰鼓楼からは、1日3回、時間を知らせる鉦や太鼓の音が流れる
左／出石城跡。17世紀築城当時の石垣が残る
右／歴史ある芝居小屋・出石永楽館

にかけての建造物が随所に見られる。1901年開館の永楽館は、かつて日本のどの町にも必ず一軒あったが、今では数が減ってしまった芝居小屋である。ここでは現在も歌舞伎、狂言、落語などが上演され、その艶光りした美を今に伝えている。

出石ならではの味といえば、皿そば。カツオと昆布を使った濃厚なダシの味わいと出石焼と呼ばれる地元産の小皿に盛って供されるのが特徴で、町には40軒を超えるそば屋が並んでいる。店によっては、そば打ち体験ができることや、そば粉を使ったお菓子を出す店などもあるので、個性あるそば屋めぐりを堪能したい。



上／出石名物の皿そば
左／そば粉を練って揚げた菓子「そばかりんとう」はお土産にもお勧め
右／「そば藤」では、そば打ち体験もできる

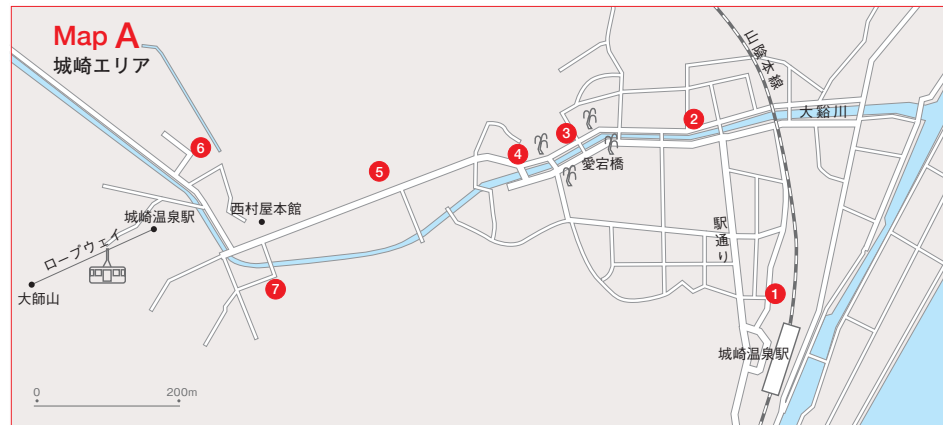
城崎・出石エリア地図

Map A 城崎エリア

- 7つの外湯
① さとの湯
② 地蔵湯
③ 柳湯
④ 一の湯
⑤ 御所の湯
⑥ 鴻の湯
⑦ まんだら湯

Map B 出石エリア

- 交通案内
大阪国際空港から但馬空港へ。城崎温泉へは連絡バスで約40分。出石へはJR豊岡駅から、出石行きバスで約30分
●問い合わせ
西村屋本館
<http://nishimuraya.ne.jp/honkan/>
永楽館
<http://www.izushi-tmo.com/eirakukan/>
(日本語のみ)
そば藤
<http://www.sobafuji.com/>
(日本語のみ)





江戸切子

写真●堀口宏明 協力●江戸切子協同組合

江戸切子とは、19世紀前半につくられ始めた、日本の伝統的なガラス工芸。ガラスの表面に溝や曲面を切り込んで模様をつけ、光の屈折や反射でキラキラと輝く効果をもたせたものだ。西洋から輸入されたカットグラス製品に触発された江戸（現・東京）の職人が、金剛砂と呼ばれる研磨材を使いガラスの表面に模様をつ

けたのが始まりといわれる。

熟練した職人によって細かく切り込まれる複雑な幾何学模様と透明感のある鮮やかな色彩が、江戸切子の特徴だ。やわらかな自然光に透かしたり、夜の食卓を演出したり。和製カットグラスの輝きを楽しんでみてはいかがだろうか。

niponica

にほにか

〈日本語版〉

2014 no.14

発行／日本国外務省

〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1

<http://www.mofa.go.jp/>（外務省ホームページ） <http://web-japan.org/>（日本紹介ウェブサイト）